

シム音読 ⑬

元旦の家族団らんを襲った能登半島地震。4メートルを超す津波に飲み込まれた石川県珠洲(すず)市三崎町寺家下出(てらやしもで)地区の住民は大半が高齢者であったのにもかかわらず、全員無事避難することができた。多くの家屋(かおく)が倒壊する中、地元住民の合い言葉『なにかあったら集会場』が心に**根付いていた**ことが、集会場への避難に要した時間がわずか5分だったことからわかる。

なかには、合い言葉どおり集会場へ行きたくても病気で足が悪く逃げ遅れていた人もいた。逃げ遅れた四十代の姉に向かって、妹が(今までに見たことがない海の姿を見て)、「姉ちゃん、ダメや。これ危ないから。」と言うと、姉は「いいよ、私のこと置いて逃げて。」と答えた。妹は「そんなことできない。」と泣きながら助けを呼びに行った。その後、隣人の出村正幸(いずむらまさゆき)さんに背負われて集会場へ向かい難を逃れた。出村さん自身も自室の本棚の下敷きになり脱出に手間取っていた。そんな時、助けを呼ぶ声として、膝まで水に浸(つ)かりながらも隣人を背負って100段の階段を上って集会場へと向かったのである。

能登半島の先端に位置するこの地区では、2011年の東日本大震災以降、地震と最大13・5メートルの津波を**想定して**高台に集会場を設け、集落と直結する階段を作った。これまで10年以上に渡って毎年数回、集会場へ避難する訓練を繰り返してきた。日頃の訓練がすべての住民の命を救った。

東日本大震災の「釜石の奇跡」を覚えているだろうか。宮城県釜石市の小中学生が自主的に避難し、その結果570人の命が救われたことを当時の報道が**こぞって**奇跡と呼んだ。当事者の子どもたちによると「奇跡ではない。避難は日頃の訓練の成果」。「訓練の一つで、運動場で先生の車が津波と同じスピードで追いかけてきた。必死で走って逃げても間に合わなかった。津波の恐ろしさを身をもって学んだ。」と語る。近年、大雨などの自然災害も**頻発**ひんぱつしている。非常時を生き抜くためには、知識だけでなく状況を判断して行動する「実践力」を身につけておかなければならない。



倒壊した自宅の前で